

森の絵

寺田寅彦

青空文庫

暖かい縁えんに背を丸くして横になる。小枝の先に散り残った枯れくゝの紅葉が目に見えぬ風かぜにふるえ、時に蠅あぶらのような小さい虫が小春の日光を浴びて垣根の日陰を斜めに閃く。眩しくなった眼を室内へ移して鴨居かもしを見ると、ここにも初冬の「森の絵」の額がくが薄ら寒く懸かっている。

中景の右の方は櫪かしか何かの森で、灰色をした逞たくましい大きな幹はスクスクと立ち並んで次第に暗い奥の方へつづく。隙間もない茂りの緑は霜にややさびて得えも云われぬ色彩が梢から梢へと柔らかに移り変っている。コバルトの空には玉子色の綿雲が流れて、遠景の広野の果の丘陵に紫の影を落す。森のはずれから近景へかけて石ころの多い小径こみちがうねって出る処を橙色の服を着た豆大の人が長い棒を杖にし、前に五、六頭の牛羊を追うてトボトボ出て来る。近景には低い灌木がところどころ茂って中には箒のような枝に枯葉が僅かにくっ付いているのもある。あちらこちらに切り倒された大木の下から、真青な羊齒しだの鋸のこぎり葉ばが覗のぞいている。

むしろ平凡な画題で、作者もわからぬ。が、自分はこの絵を見る度に静かな田舎の空気が画面から流れ出て、森の香は薫り、鶯ひよどりの叫びを聞くような気がする。その外にまだなん

だか胸に響くような鋭い喜びと悲しみの念が湧いて来る。

二十年前の我家のすぐ隣りは叔父の屋敷、従兄いとこの信さんの宅うちであった。裏畑の竹藪の中の小径から我家と往来が出来て、垣の向うから熟柿が覗けばこちらから鳥からすうり瓜うりが笑う。藪の中に一本大きな赤椿があつて、鶉の渡る頃は、落ち散る花を笹の枝に貫いて戦いくさ遊あそびの陣屋を飾った。木の空にはごを仕掛けて鶉を捕った事もある。

叔父の家は富んで、奥座敷などは二十畳もあつたらう。美しい毛氈もうせんがいつでも敷いてあつて、欄間らんまに木彫の竜の眼が光っていた。

いつか信さんの部屋へ遊びに行った時、見馴れぬ絵の額がかかっていた。何だと聞いたら油画あぶらえだと云った。その頃田舎では石版刷の油画は珍しかったので、西洋画と云えば学校の臨画帖より外には見たことのない眼に始めてこの油画を見た時の愉快な感じは忘れぬ。画はやはり田舎の風景で、ゆるやかな流れの岸に水車小屋があつて柳のような木の下に白い頭巾をかぶった女が家鴨あひるに餌でもやつている。何処どこで買ったかと聞いたら、町の新店にこんな絵や、もつと大きな美しいのが沢山に来ている、ナポレオンの戦争の絵があつて、それも欲しかったと云う。

家へ帰つて夕飯の膳についても絵の事が心をはなれぬ。黄昏たそがれに袖無そでなしを羽織つて母上

と裏の垣で寒竹筍かんちくたけのこを抜きながらも絵の事を思っていた。薄暗いランプの光で寒竹の皮をむきながら美しい絵を思い浮べて、淋しい母の横顔を見ていたら急に心細いような気が胸に吹き入って睫毛まつげに涙がにじんだ。何故泣くかと母に聞かれてなお悲しかった。そんなに欲しくば買って上げる。男のくせにそんな事ではと諭さとされて更にしゃくり上げた。母は虫抑えの葉を取り出して吞ませてくれたがあの中の自分の心は今でも説明は出来ぬ。幼く片親の手一つで育つてあまり豊かでない生活が臙げに胸にしみ浮世の木枯しはもう周囲に迫っていたから、何かの刺戟はすぐに訳のわからぬ悲しみを誘うたのだ。

あくる日銭ぜにを貰うて先ず学校へ行つたが、教場でも時々絵の事に心を奪われ、先生に何か聞かれても何を聞かれたか分らぬような事もあった。放課のベルを待ち兼ねて学校を飛出し、信さんに教わつた新店を尋ねたら、すぐにわかった。店へはいると一面に吊した絵のニスの香に酔うてしまう。あれも好い。これも気に入った。鍛冶屋かじやの煙突から吹き出る真赤な焰が黒い樹に映えて遠い森の上に青い月が出ている絵も欲しかったが、何となく静かなこの「森の絵」にきめた。粗末な額縁をはめてもらつてその上を大事に新聞で包んで店を出た時は、心臓が高い音を立てて踊っていた。

帰り途に旧城の後ろを通つた。御城の杉の梢は丁度この絵と同じようなさびた色をして、

お濠ほりの石崖の上には葉をふるうた棕むくの大木が、枯かれ菰こもの中のつめたい水に影を落している。濠ほりに隣となった牧牛舎の柵の中には親牛と小牛が四、五頭、愉快そうにからだを横にゆすってはねている。自分もなんだか嬉しくなつて口笛をピュツ／＼と鳴らしながら飛ぶようにして帰つた。

森の絵が引出す記憶には限りがない。豎たて一尺横一尺五寸の粗末な額縁の中にはあらゆる幼時の美しい幻が畳み込まれていて、折にふれては画面に浮出る。現世の故郷はうつり変つても画の中に写る二十年の昔はさながらに美しい。外の記憶がうすれて来る程、森の絵の記憶は鮮やかになつて来る。

他郷に漂浪してもこの絵だけは捨てずに持つて来た。額縁も古ぼけ、紙も大分煤すすけたようだが、「森の絵」はいつでも新しい。(明治四十年一月『ホトトギス』)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1996（平成8）年12月5日発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1985（昭和60）年7月5日第3刷発行

初出：「ホトトギス 第十巻第四号」

1907（明治40）年1月1日発行

※初出時の署名は「寅彦」です。

入力：Nana ohbe

校正：川向直樹

2004年6月1日作成

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

森の絵

寺田寅彦

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>